

報 告 Report

行田市における「子ども第三の居場所」プロジェクト
—調査及び基本計画—

原稿受付 2024 年 8 月 7 日

ものづくり大学紀要 第 14 号 (2024) 49~52

須田修二^{*1}, 岡田公彦^{*2}, 前野幸香^{*3}^{*1} 須田修二級建築事務所, ものづくり大学 技能工芸学部 建設学科 非常勤講師^{*2} ものづくり大学 技能工芸学部 建設学科^{*3} 元ものづくり大学 技能工芸学部 建設学科

キーワード: 建築設計, 子ども第三の居場所, リノベーション, まちづくり

1. はじめに

現代, 子どもを取り巻く環境は家庭の抱える困難が複雑, 深刻化し, 地域のつながりも希薄になる中, 安心して過ごせる居場所がなく孤立してしまうケースも少なくない. 行田市内で学習支援や子ども食堂を運営している NPO 法人「わわわ工房」より, 日本財団「子ども第三の居場所」支援事業を活用した, 誰一人取り残されない地域子育てコミュニティをつくる新たな場の設計依頼があり, 調査からケーススタディが終了した段階であるが, ここまでの一連の活動を報告する.

2. 敷地及び計画建物

- ・住所: 行田市本丸 19-16
- ・構造: 木造二階建て
- ・延床面積: 146.83 m²

敷地は入り組んだ路地等, 忍城の痕跡が残る忍小学校正門前に位置し, 忍中学校も近接しており, 子ども達が安心して通える立地である. 周辺は住宅地を形成している為, 地域との連携を促すことも可能.

リノベーションを行う計画建物は推定築 60 年. 複雑な増改築を繰り返した形跡が屋根形状に残り, 老朽化も著しく数年前から空き家となっていた.



図 1 周辺地図



図 2 計画建物写真

3. 設計方針

男女共同参画推進センターVIVA ぎょうだ調理室を時間借りして、学習支援や子ども食堂の運営を行っている「風の寺子屋」並びに「わわわ食堂」にてワークショップを開催し、問題点や多様化するニーズを分析した。その結果を踏まえ、管理側からの見通し、コミュニケーションを促す空間、プライバシーを高める空間、以上3点のバランスに着目し、図面、模型、CGにて複数のケーススタディを行った。

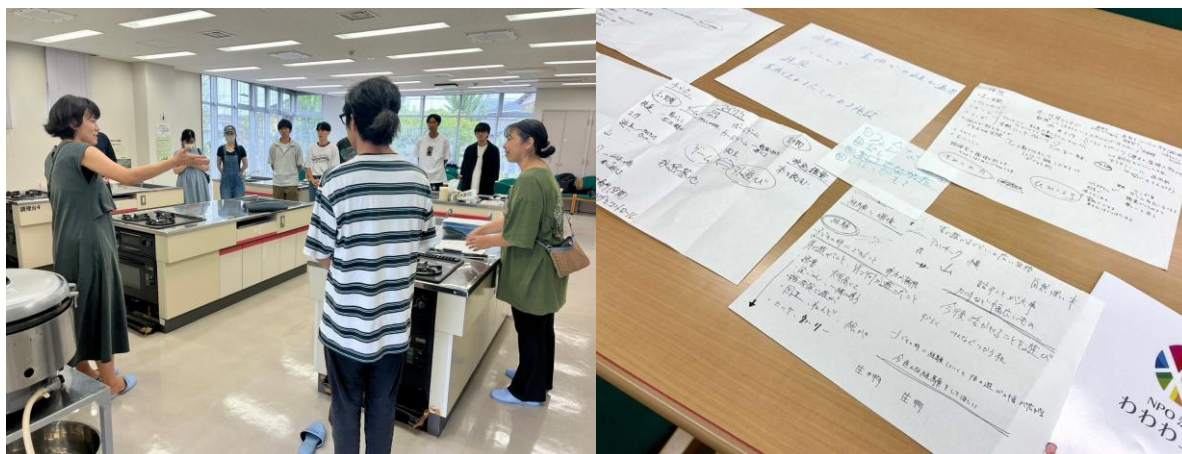


図3 ワークショップの様子

4. ケーススタディ

図4のA案はテーブル型の屋内家具を積み上げ、時には読書や学習時の机や椅子になり、時にはジャングルジムのような遊具になり、時にはプライバシーを担保する空間にと、刻々と変化する子ども達の行動にフレキシブルに対応する。また、建物外周部から中心部にかけて積み上げる高さを低くすることで、管理側からの視界が通る。

移動や組み換えも可能な為、状況に応じて配置替えをすることも、外部に持ち出して使用することもでき、子ども達の想像力を刺激する。また、間仕切り壁のように設置をしたり、建物外周部だけに配置をすることで管理者の視界を調整することもできる。

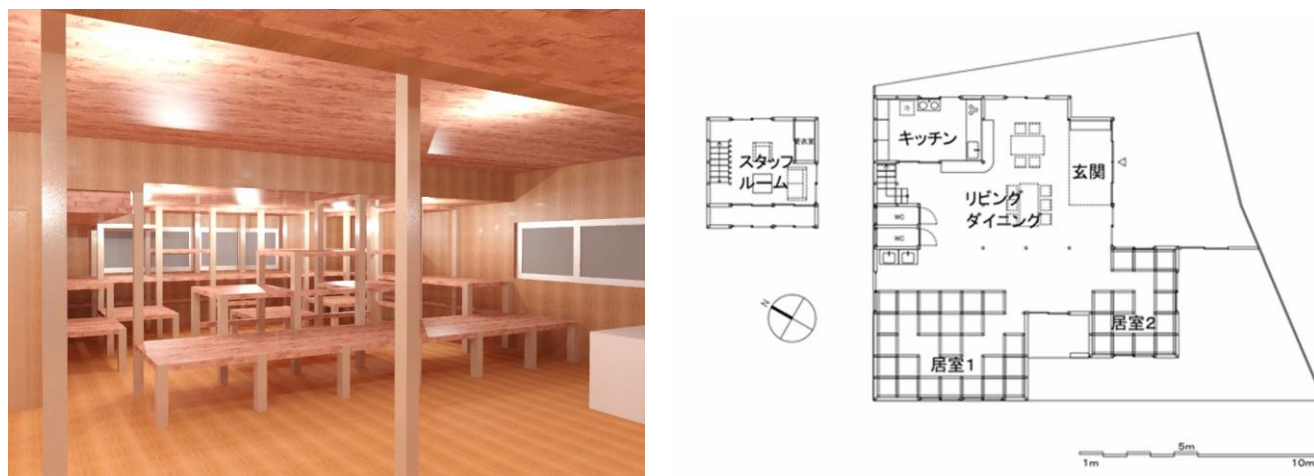


図4 A案CGパース、平面図

図5のB案はリビングダイニングと1人～4人の仕切られたスペースを設けることで、大勢で居ることも、少人数で居ることも、一人で居ることも許容し、子ども達の特性に合わせた明確なゾーンを確保することで安心できる居場所を提供する。

間仕切り壁には格子を活用し、奥に行くほど格子が重なりプライバシーを確保できるが、空間自体は繋がっているので管理側から音や気配を感じ取ることができる。

また、升目格子にすることで横棧に足をかけて壁に登ったり、ぶら下がったりと子ども達のアクティビティ性を高める設計とした。

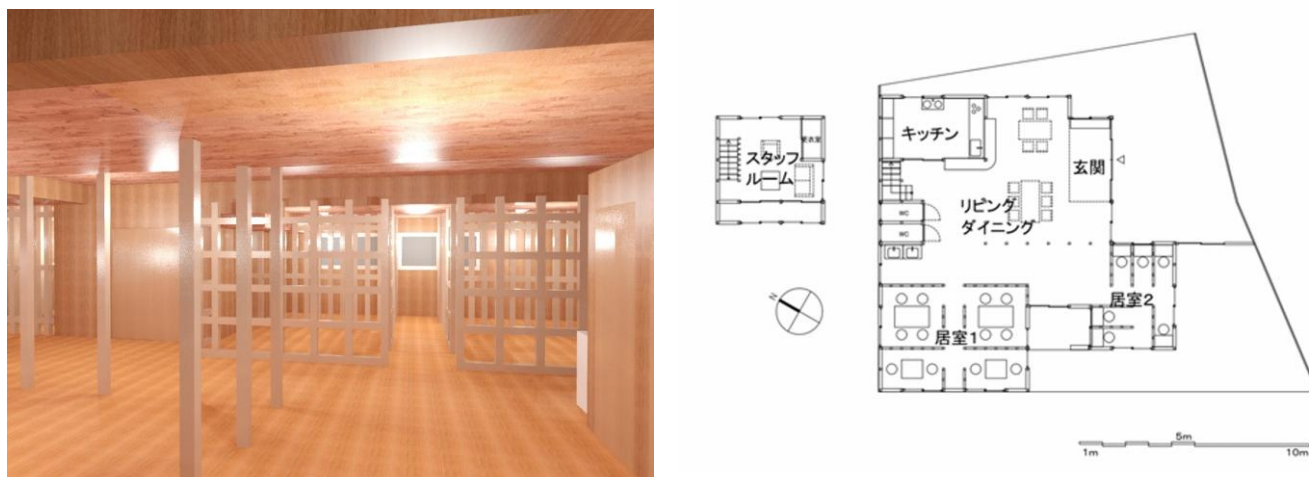


図5 B案CGパス．平面図

図6のC案は構造を兼ねた逆三角形の壁で居室を間仕切った．平面的にも歪な形状の居室は滞在する場所によっても、目線の高さによっても見える景色が変わる為、居心地の良い場所を探すことになる。

居心地は家具の配置や手荷物の置き場、人数にも大きく影響されるので工夫や他者への配慮が求められる．また、動線の幅員を広げてそこにも逆三角形の壁をはめ込むことで曖昧な空間が生まれ、そこを居場所とすることもできる。

管理側からの視界は一定遮られるが、滞在時間の長いキッチンを中心に配置することで子ども達との距離を近づけ、管理が行き届くよう考慮した。

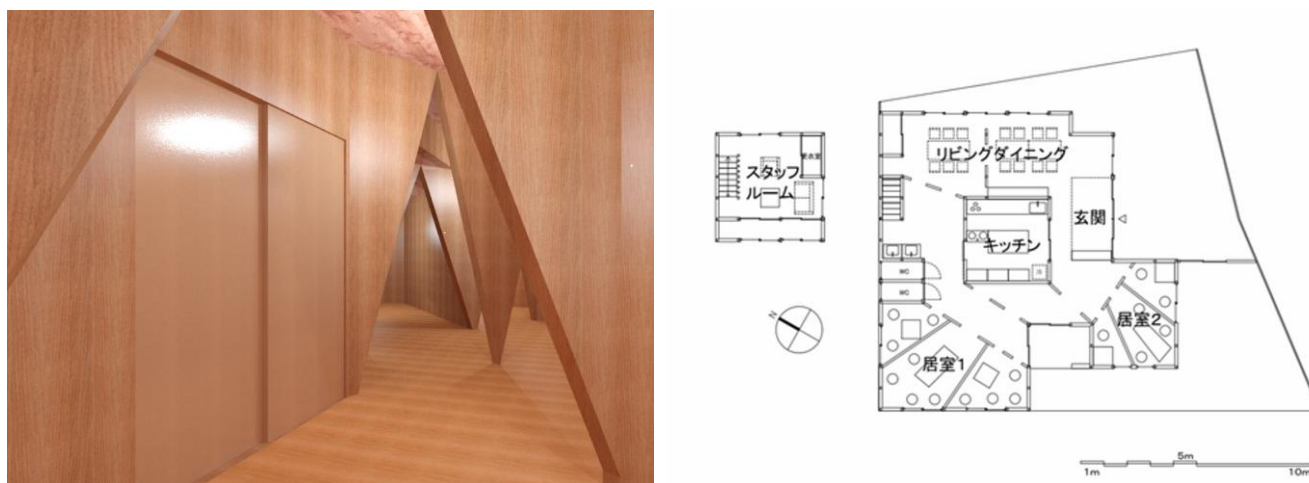


図6 C案CGパス．平面図

ケーススタディの図面，模型，CGを用いて運営者と子ども達にプレゼンテーションを行い，それぞれの案に対して挙がった意見をフィードバックしつつ再編成を行い，基本設計をまとめていく．



図7 プレゼンテーションの様子

5. まとめ

ひとり親世帯や親の共働きによる孤立や孤食，発達特性による学習や生活上のハードル，経済的理由による機会の喪失など，各々の置かれている状況により困難に直面している子ども達への，居場所や空間構成の在り方について，建築設計側も最適解を模索している日本の実状であったが，本稿の調査及び基本計画を通し，子供たちが安心感を持ちながら過ごせる場所であり，大人の目が行き届くプロトタイプ設計の一端を担うことができた．

ケーススタディの結果，管理側からの見通し，コミュニケーションを促す空間，プライバシーを高める空間，相反するバランスの3点に対してここでの最善策は，刻々と変わる状況やその子の特性に応じてフレキシブルに変えられることであることが分かった．それは子ども達にとって第三の居場所が，ポジティブな原風景となる空間演出も求められている．

また，空き家を活用することで街の記憶を残しながら景観を改善し，共助的な建築や街並みを提供していく中での地域の反応や，子ども達の心理的健康に影響を及ぼす効果及びフィードバックにも期待できる空間になることを望む．

謝 辞

誰一人取り残さない地域子育てコミュニティの形成にご尽力なさっている「NPO 法人わわわ工房」野本翔平さんをはじめ関係者の皆様に今回の機会と貴重なご意見を頂き，深く感謝申し上げます．

文 献

- 1) 仙田満：こどものためのあそび空間，市ヶ谷出版社，2000．
- 2) 平田晃久：建築とは〈からまりしろ〉をつくることである，LIXIL 出版，2011
- 3) レイ・オルデンバーグ：サードプレイス，みすず書房，2013